大学新入生の適応について

―― 自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連 ――

梅　本　信　章

1. 目　　的

人間は社会的動物であり，我々は日常の生活において，継続的な関係であれ一時的なものであれ，多くの対人関係を経験している。人間関係は個人の環境の非常に大きな部分を占めている。これらの対人関係の内容やそれについての認知が個人の社会的生活への適応に大きく関係していることは周知のことである。

ところで，就職や転勤，新入学や転校あるいは転居等はそれまでの環境から新しい環境へ移っていくことを余儀なくする。それはまた新しい対人関係を形成することをも意味する。新しい環境への移行は多少とも緊張を伴うものであり，そこでの対人関係の中へ円滑に入っていくことができるかどうか，単なる顔見知りや知人の関係から友人関係へ発展して行くかどうかなどは新環境への慣れや適応に影響し，新生活を肯定的に受け取るか，否定的に評価するかといったことにも関連している。新しい関係に円滑に入っていくことができたり，親しく話をする相手ができれば，新生活にも馴染んで緊張も低下し，新生活への評価もどちらかというと好意的・肯定的なものになると考えられる。それに対して，新しい人間関係になかなか馴染めなかったり，親しい友人ができない場合には，緊張を緩めることができずにストレスを強く感じたり，不満を抱いたりして，新生活に対して余り好意的でない印象を持ったり，否定的な評価をしがちではないかと考えることができる。

日本では大学生と言うと受験勉強から解放され，自由で束縛の少ない生活が送れるというイメージが定着している。それ故，大学新入生自身が新生活に喜びを感じたり，期待に胸を膨らませることも多いだろう。しかし同時に，新入生はその多くが大きな環境変化に直面するのである。彼らはそれまでにも幼稚園・保育園，小学校，中学校，そして高校と入園・入学を何度か経験してきているので，新しい環境への移行は初めてではないだろう。ただ，幼稚園・保育園から高校までは，一般的には学校場面の環境の移行であって，家庭並びに近隣環境の変化・移行は伴わない。従って，新環境での緊張や不安は家庭によって軽減され得るだろう。それに対して大学の場合，その多くは家庭・近隣を離れて一人の生活を始めなければならないし，学校場面でも同じ高等学校からの進学者は少ない場合が多く，顔見知りは余りいないのが一般的である。新入生は新しい学校場面に直面するだけでなく，それ以外の場においても，大きな環境的変化を経験しなければならないのである。青年期が親からの自立の時期であるにせよ，親・家庭は青年にとって大きな拠り所である。それだけに新しい生活への緊張と不安は，高校までのそれよりは，強いものがあると予想できるし，ホームシックにかかる者も結構多いと思われる。山口大学学生相談所の平成元年度の初回来談者数は36名であるが，1年生が21名であり，その内7名が4月に来談している（光岡1991）。また，大学生の回想に基づく調査であるが，1年生と3年生の4月～5月並びに10月に心配事・悩み・不安を感じたとする者が他の時期よりも多いという結果もある（宮川他1984）。いずれも新入時や専門課程進級直後であって，環境や状況の変化・移行に伴って不安や悩み・心配が増加することを示していると考えることができる。

こうした状況にある新入生にとって，入学後

比較的早い時期に，新しい人間関係を形成して，行動を共にしたり色々なことを話すことのできる相手，気楽につき合える仲間や親しい友人を得ることは，不安や緊張を緩和したり寂しさを和らげたりすることに対して，効果があると考えられる。そして，それは大学生活全般についての印象や評価にも影響するだろう。なお同じ新入生でも，自宅から通学する学生に比べて，親元を離れてアパートや下宿生活に入る者の方が環境変化・移行の程度・範囲が大きく，それだけに親しい友人が得られない場合の影響も強いと考えられる。本研究の目的は，新入生の新生活への適応について，入学後比較的早い時点での親しい友人の有無や居住形態と自己の大学生活へのイメージとの関係から検討することである。古川他（1983）は心理的距離地図を描かせるという方法で，大学新入生の対人関係の認知の変化を検討している。それによれば，入学直後の時点では新環境よりも旧環境の方が描かれた人の人数が多く，心理的距離も近いが，新環境のそれが旧環境に急速に近接し，5月中旬には両者間の差がなくなっている。これは新環境における友人関係が，入学後1カ月前後という短期間内で，急速に形成されることを示している。従って本研究でも，第一に5月上旬での友人の有無を取り上げる。検討する仮説は ① 入学当初に，親しい友人のいる新入生の方が，いない新入生よりも，自己の大学生活に対するイメージが肯定的であろう，② 親しい友人のいない新入生の場合，自宅通学生の方がアパートや下宿の者よりも自己の大学生活に対するイメージが肯定的であろう，の2点であり，さらに，大学生活にかなり慣れたと考えられる時点での友人の有無と大学生活に対するイメージの関係について検討することも第2の目的である。ただ，後に詳述するが，サンプル数の関係で仮説 ② と第2の目的の検討は参考程度のものになった。

2. 方　　法

調査は記名式の質問紙法によって実施された。質問は4つから成る。第一は自己の大学生活に対するイメージを把握するためのものであり，25組の形容詞対を使ったSD法形式のものである。形容詞対は井上・小林（1985）を参考に選択した。評定は7段階（とても・かなり・やや・どちらでもない・やや・かなり・とても）である。第二は10項目からなる自尊感情測定尺度である（Rosenberg. 1965：星野 1970）。第三は友人関係に関する質問であり，8項目からなる（表3-1～表3-8を参照）。これらの項目は他の研究（梅本 1987）で，女子青年が望ましい友人として高い評価を与えたものである。各項目毎に現在在学している大学とそれ以外の所の各々に該当する友人が「いる」か「いない」かを回答してもらうものである。最後はソシオメトリックテスト形式で，同じ大学の在校生でいつも行動を共にしている人の名前を6人まで列挙してもらうものである。最後に名前と居住形態（自宅，アパート，下宿，その他）を聞いている。なお，自尊感情測定尺度はダミーの質問である。調査は1990年5月上旬と9月上旬の2回実施したが，質問は同一である。第1回調査の被験者は大学1年生男子52名，女子82名の計134名であり，第2回調査のそれは，大学1年生男子28名，女子56名の計84名である。なお第2回については，第1回調査にも回答している63名（男子23名，女子40名）だけを分析の対象とした。さらにこれとは別に，25組の形容詞対のどちらの方が一般に望ましいとされているかに関する調査も実施した。（1991年11月実施。被験者は大学1年生と2年生，男女計112名）。

3. 結果と考察

＊　友人得点について

友人関係に関する8項目の各々について，「いる」（該当する友人がいる）と回答した場合1点，「いない」の場合を0点と得点化し，8項目分合計したものを個人の友人得点とした。従って得点の範囲は0～8点である。友人得点は在学している大学（以後「現大学」と記す）とそれ以外の所（以後「他所」と記す）とを別個に算出した。

友人得点の意味であるが，一人でも親密な友人がいれば，8項目の大半に該当すると回答する可能性が高く，逆に，数は多くても単なる知人あるいは表面的な友人関係である場合には，友人得点が低くなると考えられる。しかし，友人得点が友人数と関係がないわけでもない。親密な友人が多数いれば友人得点は高くなり，一人もいなければ低くなると考えられる。「現大学」の友人得点と被験者がソシオメトリック選択で挙げた人数の相関は男子が $r=0.57$，女子が $r=0.27$ であり，共に有意な相関であった。こうした点から考えれば，友人得点は友人関係の親密さと友人数の両者を含んだものといえるが，項目の内容から，ここでは親密さの指標として取り扱う。

男子の平均は「現大学」が4.7，「他所」が7.2であり，女子の平均は「現大学」が5.6，「他所」が7.6であった（表1参照）。「他所」に関しては男女の平均に差はなかったが，「現大学」においては，有意な性差（$t=2.009, p<.05$）があった。「現大学」の平均を基準にして友人得点の高い群と低い群に分けて分析するため，以後は男女別に結果を検討する。男子の場合は，友人得点が5点以上を高群，4点以下を低群とする。女子の場合は，6点以上を高群，5点以下を低群とする。表2は男女別に高群と低群の友人得点の平均を示したものである。「現大学」に関しては，男女共に高低間に有意差がみられた（男子，$t=13.151$，$p<.001$：女子，$t=15.541$，$p<.001$）。一方，「他所」に関しては，男女共に高低間に差はみられず，いずれの群も高い値を示している。被験者の大部分には，同じ大学の在校生の中に親密な関係の友人がいてもいなくても，大学以外のところに親しい友人がいると言える。入学後1カ月も経過しない時点であるから，これらの友人は入学以前の旧環境での友人と考えて差し支えないだろう。

次に，「現大学」の友人得点の8つの下位項目に関して検討する。表3-1～表3-8は，8項目毎に，該当する友人の有無の度数を示したものである。カイ自乗検定の結果，8項目全てで，男女ともに有意差がみられ，低群よりも高群の方で，該当する友人が「いる」とする者が多いことが確かめられた。また，男女ともに高群では，8項目全てで，該当する友人が「いる」とする者が「いない」と回答した者よりも多い。しかし男子低群では，「いる」と回答した者が「いない」とする者よりも多いのは「気を使わなくてすむ人」のみである。一方，女子低群では，「気を使わなくてもすむ人」の他に，「相談相手になってくれる人」，「一緒になって喜んだり，悲しんだりしてくれる人」，「慰めたり，励ましたりしてくれる人」でも，「いる」とする者が「いない」とする者よりも多くなっている。さらに，男子全体と女子全体で比較した場合でも，「相談相手になってくれる人」，「一緒になって喜んだり，悲しんだりしてくれる人」，「慰めたり，励ましたりしてくれる人」の3項目で有意差がみられ，女子の方が「いる」とする者が多い。これは友人との関係の内容に男女で相異があることを示していると考えられる。

ところで，「目的」のところで挙げた仮説を検討するためには，居住形態と友人得点，つまり

表1　友人得点の平均と標準偏差

		男子	女子
現大学	平均	4.7	5.6
	σ	2.68	2.32
	n	52	82
他　所	平均	7.2	7.6
	σ	1.73	1.23
	n	52	82

表2　友人得点の平均と標準偏差

		男　子		女　子	
		現大学	他　所	現大学	他　所
低群	平均	2.0	7.0	3.3	7.5
	σ	1.36	1.78	1.41	1.19
	n	22	22	36	36
高群	平均	6.8	7.4	7.5	7.6
	σ	1.15	1.67	0.77	1.26
	n	30	30	46	46

表 3-1　何か困ったことや悩みごとがある時にあなたの相談相手になってくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	7	15	23	13
高群	27	3	45	1
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-2　これからの生き方や人生観などについて真面目にあなたの話相手になってくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	4	18	2	34
高群	26	4	43	3
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-3　一緒にいる時，あなたがあまり気を使わなくてすむ人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	15	7	22	14
高群	29	1	45	1
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-4　あなたの性格や考え方などを正しく理解してくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	2	20	9	27
高群	23	7	40	6
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-5　嬉しい時や悲しい時に，一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	6	16	25	11
高群	23	7	45	1
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-6　あなたの間違いや短所などについて，率直に注意したり忠告したりしてくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	1	21	3	33
高群	21	9	37	9
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-7　あなたの性格や行動などについて，正直な意見や感想を述べてくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	2	20	7	29
高群	26	4	42	4
x^2	p<.001		p<.001	

表 3-8　あなたが悲しんでいる時やがっかりしている時などに，慰めたり励ましたりしてくれる人

	男子		女子	
	いる	いない	いる	いない
低群	7	15	29	7
高群	28	2	46	0
x^2	p<.001		p<.001	

表4 「望ましい」形容詞に関する回答結果

No	形容詞	選択率	形容詞	選択率
(10)	明るい	96.4	暗い	3.6
(2)	自由な	95.5	不自由な	4.5
(1)	にぎやかな	94.6	さびしい	5.4
(12)	陽気な	93.8	陰気な	6.2
(24)	楽しい	90.2	苦しい	9.8
(19)	暖かい	92.9	冷たい	7.1
(11)	親しみやすい	93.8	親しみにくい	6.2
(21)	面白い	93.8	つまらない	6.2
(16)	愉快な	92	不愉快な	8
(20)	好きな	95.5	嫌いな	4.5
(18)	感じのよい	92.9	感じの悪い	7.1
(15)	気持のよい	94.6	気持の悪い	5.4
(4)	嬉しい	92.9	悲しい	7.1
(17)	充実した	94.6	空虚な	5.4
(9)	意欲的な	90.2	無気力な	9.8
(14)	柔らかい	85.7	かたい	14.3
(8)	活発な	94.6	不活発な	5.4
(25)	頼もしい	94.6	頼りない	5.4
(22)	安定した	93.8	不安定な	6.2
(23)	元気な	92	疲れた	8
(13)	穏やかな	87.5	激しい	12.5
(7)	真面目な	93.8	不真面目な	6.2
(5)	たくましい	95.5	弱々しい	4.5
(3)	まとまった	92.9	ばらばらな	7.1
(6)	地味な	70	派手な	30

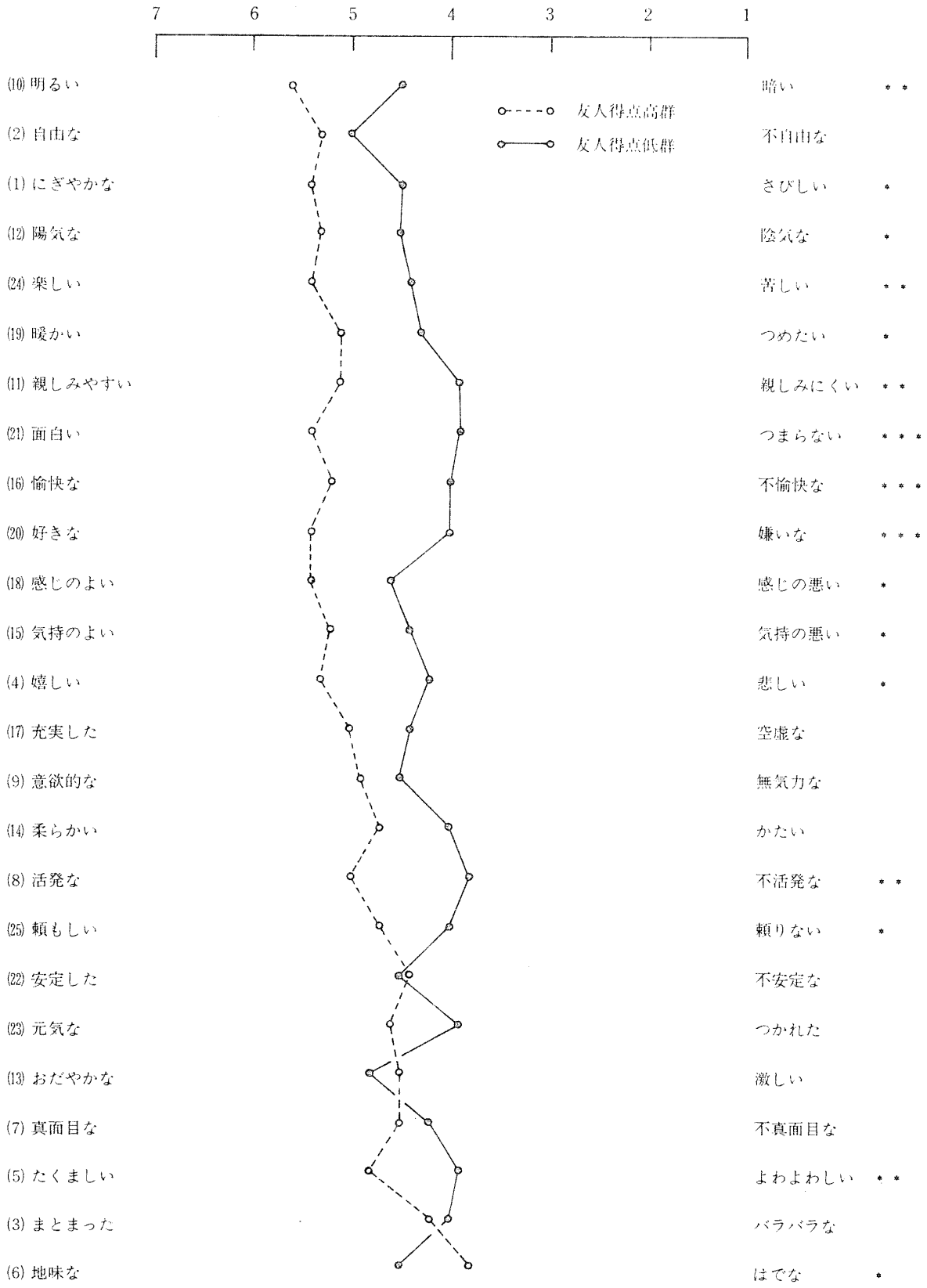
N＝112 (%)

自宅か自宅外（アパートや下宿・寮）かという基準と大学に親密な友人がいるかどうかという2つの基準によって，被験者を4群（「自宅・友人得点低群」，「自宅・友人得点高群」，「自宅外・友人得点低群」，「自宅外・友人得点高群」）に分類する必要がある。しかし，今回データの得られたサンプル数は余り多くなく，しかも友人得点に性差がみられたために，男女別に検討せざるをえなかった。こうしたことから，男女各々を4群に分けると，群によってサンプル数の偏りが大きくなるとともに，サンプル数の非常に少ない群ができてしまう。例えば，男子の場合，「自宅・友人得点低群」はわずか2名である。女子の方は男子よりもサンプル数が多いが，それでも「自宅・友人得点高群」が10名，「自宅・友人得点低群」が12名である。検討の基準になるデータがSD法によるイメージの評定だけに，ある程度のサンプル数が必要であると思う。従って，以下では，友人得点のみを基準として，被験者を友人得点高群と低群の2群に分類して，仮説①を検討することを主目的とする。なお，女子に関して，居住形態×友人得点による分析を一応行うが，あくまでも参考資料程度のものである。

＊ 大学生活に対するイメージについて（友人得点にのみ基づいて分析した場合）

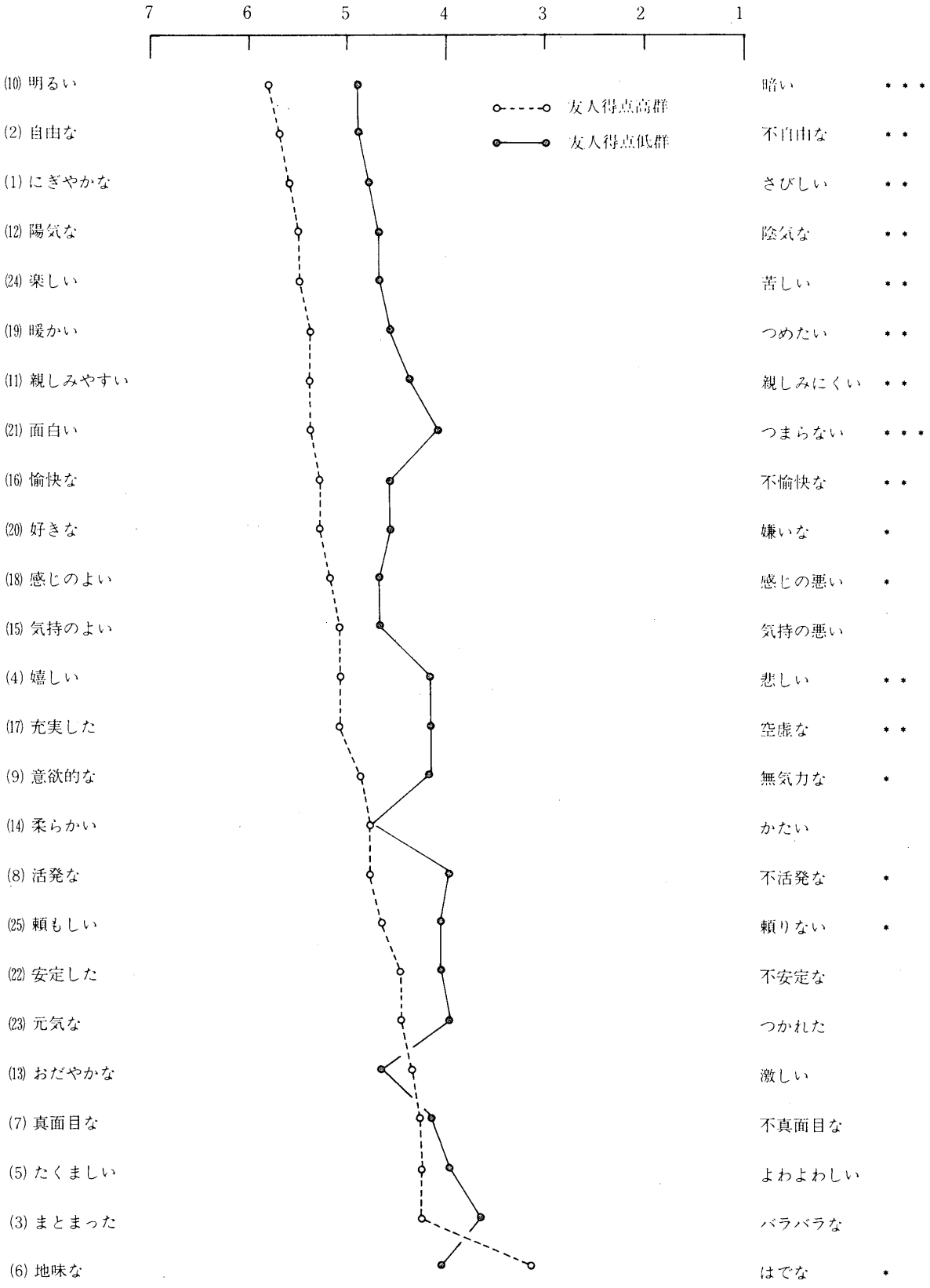
表4は，25組の形容詞対について，どちらの形容詞が「社会一般で望ましいと考えられている」と思うかという質問に対する回答結果である。一部を除いたほとんどの対において一方に選択が集中している。これに基づいて，大学生活に対するイメージの評定結果を，望ましい方に「とても」と回答している場合は7点，「かなり」ならば6点，他方の方に「とても」と回答している場合は1点，「かなり」ならば2点というように，7点～1点に点数化して集計した。従って，点が高ければ望ましい肯定的なイメージを持っているということができる。図1と図2は男女それぞれの平均に基づくプロフィールである（平均と標準偏差の一覧は付表を参照）。

形容詞対毎に検討してみると，女子の場合，友人得点高群ではほとんどの項目が4点以上であり，5点以上のものも14項目ある。大学に親しい友人のできている新入生は大学生活に対して，かなり「明るい」，「自由な」，「にぎやかな」，「陽気な」，「楽しい」，「暖かい」，「親しみやすい」，「面白い」，「愉快な」，「好きな」，「感じのよい」，「気持のよい」，「嬉しい」，「充実した」といった肯定的なイメージを抱いていることが理解できる。一方，低群でも，ほとんどの項目が4点以上になっているが，5点以上のものは一つもない。大学にそれほど親しい友人がいない者は，大学生活に関して，否定的なイメージを持っているわけではないが，そうかといって，取り立てて肯定的なイメージを持っているわけでもないと言える。「明るい」，「自由な」，「にぎやかな」，「陽気な」，「楽しい」，「暖かい」，「親しみやすい」，



（＊＊＊ P＜.001,　＊＊ P＜.01,　＊ P＜.05）

図１　新入生の大学生活に対するイメージ（第１回調査＝男子）



（＊＊＊P＜.001, ＊＊P＜.01, ＊P＜.05）

図2　新入生の大学生活に対するイメージ（第1回調査＝女子）

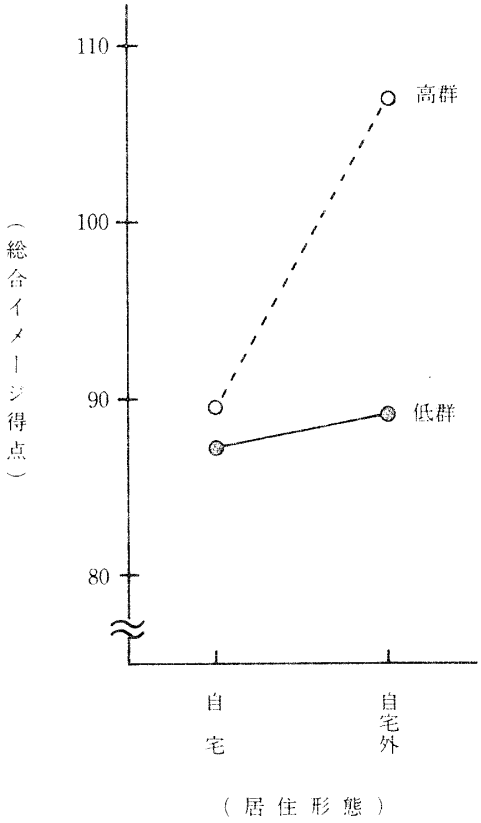


図3　総合イメージ得点（女子）
友人得点×居住形態

「面白い」,「愉快な」,「好きな」,「感じのよい」,「嬉しい」,「充実した」,「意欲的な」,「活発な」,「頼もしい」,「地味な」の17項目に関して，高群と低群の間で有意差がみられた(t検定)。「地味な」を除いた16項目で高群の方が低群よりも平均が高く，高群の方が肯定的なイメージを抱いていると考えることができる。

男子の場合も，高群はほとんどの項目が4点以上であり，15項目が5点以上である。親しい友人のできている新入生は，女子の場合とほぼ同じ肯定的なイメージを，大学生活に対して持っていると言える。一方，低群では，4点を大きく下回る項目はないものの，「自由な」を除いて5点以上の項目もない。やはり女子と同様に，否定的ではないが，取り立てて肯定的でもない。「明るい」,「にぎやかな」,「陽気な」,「楽しい」,「暖かい」,「親しみやすい」,「面白い」,「愉快な」,「好きな」,「感じのよい」,「気持ちのよい」,「嬉しい」,「活発な」,「頼もしい」,「たくましい」,「地味な」の16項目に関して，高群の平均と低群の平均の間に有意差がみられた。これも女子と同様に，「地味な」を除いて他は全て高群の方が高い値となっている。このことから高群は，低群に比較して，現在の大学生活に対してより肯定的なイメージを持っていることが理解できる。

次に，各形容詞対毎に個別に検討するのとは別に，まとめて検討するために25形容詞対について因子分析を行った(表5参照)。固有値1以上で求めた結果，2因子が抽出された。第I因子と第II因子の寄与率は各々43.0%と6.7%である。因子負荷量が0.5以上のものだけを選択すると，第I因子が20項目，第II因子が3項目であった。固有値，寄与率ともに第I因子が顕著に大きな値を示していることから，実質的には1因子構造に近いと考えられる。また，表4で，一方が他方よりも望ましいと一般的に共通して考えられていると判断する基準を選択率90%以上として考えた場合，第I因子の全ての項目が基準を満たしているのに対して，第II因子では3項目中2項目が基準を満たしていない。さらに，第I因子の20項目の評定値を被験者毎に総計した値と20項目各々との相関係数を求めると0.83～0.53であった。以上のことから，第I因子の20項目の評定値の総計をもって，各被験者の総合イメージ得点とすることにした。得点の範囲は20～140であり，得点が高いほど肯定的なイメージを持っていることになる。表6は男女・高低群別の総合イメージ得点の平均と標準偏差を示したものである。男女いずれの場合でも，高群の平均の方が低群のそれよりも有意に高かった（男子，$t=3.739, p<.001$：女子，$t=4.046, p<.001$)。大学入学後1カ月弱経過した時点で，男女共に同じ大学の在校生の中に親しい友人を得ている者は，それほど親しい友人のいない者よりも，自分の大学生活に対して好ましい肯定的なイメージを抱いていることが改めて理解できる。従って，仮説①は検証された。

＊　大学生活に対するイメージについて（友人得点と居住形態からの分析）

被験者の居住形態については，アパート，下

表5 因 子 負 荷 量

No	形 容 詞 対	第1因子	第2因子	h^2
(24)	楽しい―苦しい	0.8316	0.0313	0.6925
(21)	面白い―つまらない	0.8307	−0.0718	0.6952
(18)	感じのよい―感じの悪い	0.8117	0.2690	0.7312
(10)	明るい―暗い	0.8107	−0.1926	0.6943
(17)	充実した―空虚な	0.8091	0.2170	0.7017
(4)	嬉しい―悲しい	0.7675	−0.0658	0.5934
(20)	好きな―嫌いな	0.7613	0.0646	0.5838
(1)	にぎやかな―さびしい	0.7395	−0.1248	0.5624
(16)	愉快な―不愉快な	0.7392	0.0581	0.5498
(11)	親しみやすい―親しみにくい	0.7150	−0.0394	0.5128
(15)	気持のよい―気持の悪い	0.6968	0.3188	0.5872
(23)	元気な―つかれた	0.6910	0.1531	0.5009
(12)	陽気な―陰気な	0.6886	−0.2413	0.5324
(19)	暖かい―冷い	0.6815	0.3041	0.5569
(8)	活発な―不活発な	0.6733	−0.2381	0.5100
(9)	意欲的な―無気力な	0.6505	0.1766	0.4543
(25)	頼もしい―頼りない	0.6336	0.2416	0.4598
(2)	自由な―不自由な	0.5750	−0.1314	0.3479
(22)	安定した―不安定な	0.5274	0.3649	0.4113
(5)	たくましい―弱々しい	0.5194	0.1802	0.3022
(13)	穏やかな―激しい	−0.0162	0.6072	0.3690
(7)	真面目な―不真面目な	0.1579	0.5442	0.3211
(6)	地味な―派手な	−0.3155	0.5022	0.3517
(14)	柔らかい―かたい	0.4461	0.1094	0.2110
(3)	まとまった―ばらばらな	0.4086	0.1265	0.1830
	寄 与 率	43.0%	6.7%	

宿及び寮と回答した者を合わせた自宅外群と自宅群とに分けて検討する。表7は，女子に関して，居住形態別（自宅 vs 自宅外）並びに友人得点別（高 vs 低）に，総合イメージ得点の平均と標準偏差を示したものである。二元配置の分散分析を行った結果，居住形態と友人関係の主効果（$F=6.277$, $p<.05$; $F=6.277$, $p<.05$）及び交互作用が有意であった（$F=4.394$, $p<.05$）。自己の大学生活に対するイメージの肯定度に関して，低群では，自宅群と自宅外群とに差はみられないが，高群では，自宅外群は自宅群よりも肯定的なイメージを持っている。また，自宅群の場合，高群と低群の間には有意差はないが，自宅外群では，高群の方が低群よりも肯定的なイメージを持っている。従って，低群においては自宅通学生の方が，アパートや下宿・寮の者よりも，自己の大学生活に対して肯定的なイメージを持っているだろうという仮説②は検証されなかった。

男子については，自宅通学者数が少なく，しかもその中で友人得点の低群に属する者が2名しかいなかったため，検討しなかった。

入学後に親しい友人が得られない新入生の場合，緊張や不安，戸惑いや寂しさ等の緩和が遅れがちで，大学生活に馴染むのも遅れ，それだけに大学生活に対するイメージの肯定度も，親しい友人の得られた新入生よりも低いだろうという点は確かめることができた。しかし，親しい友人が得られない場合，自宅通学生は環境の移行が学校に限られている上に，家族の存在に

表6　総合イメージ得点の平均と標準偏差

		男　子	女　子
低群	平均	85.1	88.5
	σ	13.2	13.77
	n	22	36
高群	平均	102.5	103
	σ	19.57	18.4
	n	30	46

表7　総合イメージ得点（居住形態×友人得点）の平均と標準偏差（女子）

		自　宅	自宅外
低群	平均	87.4	89
	σ	15.92	12.52
	n	12	24
高群	平均	89	107
	σ	16.87	16.84
	n	10	36

表8　1回目と2回目の友人得点

（女子）

		1回目	2回目
低群	平均	3.8	4.2
	σ	1.01	1.03
	n	18	9
高群	平均	7.5	7.5
	σ	0.72	0.71
	n	22	31

（男子）

		1回目	2回目
低群	平均	2.2	2.6
	σ	1.62	0.99
	n	9	8
高群	平均	6.8	7.3
	σ	0.94	1.01
	n	14	15

表9　1回目と2回目の総合イメージ得点

（女子）

		1回目	2回目
低群	平均	91.4	88.7
	σ	10.7	16.63
	n	18	9
高群	平均	104.7	99.7
	σ	17.52	19.21
	n	22	31

（男子）

		1回目	2回目
低群	平均	86.3	78.7
	σ	14.86	9.88
	n	9	8
高群	平均	109.9	107.3
	σ	21.97	19.22
	n	14	15

表10　1回目と2回目の友人得点

		1回目	2回目
低―低	平均	3.7	4.2
	σ	0.97	1.03
	n	9	9
低―高	平均	4	7.9
	σ	1.05	0.31
	n	9	9
高―高	平均	7.5	7.4
	σ	0.72	0.78
	n	22	22

表11　1回目と2回目の総合イメージ得点

		1回目	2回目
低―低	平均	90.2	88.7
	σ	12.71	16.63
	n	9	9
低―高	平均	92.7	102.4
	σ	7.96	17.84
	n	9	9
高―高	平均	104.7	98.5
	σ	17.52	19.63
	n	22	22

よって緊張・不安や寂しさ等が緩和されやすいのに対して，アパートや下宿の新入生では，学校に限らない全面的な環境移行であるだけに，家族によって緩和されることも少なく，緊張や不安，戸惑いや寂しさは相対的に大きく，しかも緩和が一層遅れがちになるために，大学生活になかなか馴染めず，大学生活に対するイメージの肯定度も，自宅通学生と比較して，低くなるだろうという点については，女子の場合，被験者数に問題が残るにせよ，そうにはならなかった。この点について考えてみる。総合イメージ得点は20～140の範囲をとり，80が中央であるが，4群全ての平均が80以上である。これは全体的にやや肯定的なイメージを持っていることを示している。このことは，被験者の多くにとって，環境移行に伴う不安等よりも，大学生活への期待や大学生になった喜び・解放感といったものの方が大きく，緊張や不安・寂しさがあまり気にならないことを示していると考えることができる。図3から明らかなように，自宅・高群，自宅・低群ならびに自宅外・低群の3群はほぼ同じ肯定度であるのに対して，自宅外・高群の肯定度のみが群を抜いて高くなっている。これは家庭から離れた緊張・不安や寂しさよりも，一人で生活することによる自由への期待や親から干渉されない解放感が強く，しかも大学で親しい友人を得ることができているために，なお一層，新生活が自由で面白い，楽しいと感じられているためではなかろうか。そのため，自宅外，高群が，自宅から通学する者や自宅外で親しい友人の得られない者よりも，肯定的なイメージを強く持っているのであろう。ただ，この点については，サンプル数を増やして再度検討する必要がある。

＊　1年次5月と9月の比較について

上記の検討は，入学直後と言ってよい時期であったが，入学から5カ月余り経過した時点でも，親しい友人の存在と大学生活に対するイメージとの間に関係があるかどうかについて検討する。1回目（5月実施）調査の被験者134名の中で，2回目（9月実施）の調査にも回答している者は63名（男子23名，女子40名）であって，やはり，サンプル数が少ないという問題があるが，参考までに分析する。表8は男女各々の友人得点の平均と標準偏差を，また，表9は総合イメージ得点の平均と標準偏差を示したものである。友人得点に関しては，男女とも，1回目と2回目のいずれも，高群の方が低群よりも有意に高いことが確かめられた（男子1回目 $t=7.261, p<.001$, 2回目 $t=10.187, p<.001$：女子 $t=12.402, p<.001$, 2回目 $t=8.6, p<.001$）。総合イメージ得点に関しては，男子の場合，1回目と2回目のいずれにおいても，高群の方が低群よりも得点が高く（1回目 $t=2.923, p<.001$, 2回目 $t=4.504, p<.001$），入学直後だけでなく，大学生活にも慣れてきたと思われる入学5カ月後でも，親密な友人のいる者の方が，そうでない者よりも，大学生活に対して肯定的なイメージを抱いている。一方，女子の場合は，1回目では，高群の方が低群よりも有意に高いが（$t=2.872, p<.01$），2回目においては，両群間に差はみられない。これは親密な友人の有無とイメージの肯定度とは，9月の時点では余り関係がないということだが，この点に関して，別な面から検討してみる。それは1回目と2回目で所属する群の変化のある者とない者についての検討である。即ち，1回目と2回目がともに友人得点高群である者（「高―高」群，22名），1回目は低群であるが，2回目は高群になった者（「低―高」群，9名），並びに2回とも低群だった者（「低―低」群，9名）の3群に分けて，各々1回目と2回目とを比較してみる。表10は友人得点についての平均と標準偏差を，表11は総合イメージ得点の平均と標準偏差を示したものである。3群毎に友人得点の1回目と2回目を比較してみると，「高―高」群と「低―低」群の場合，2回の間に差はみられない。それに対して，「低―高」群では有意差（$t=9.196, p<.001$）がみられ，2回目の方が1回目よりも高い。「低―高」群の者は，入学当初にはそれほど親密な友人はいないが，5カ月後には親密な友人関係が形成できていると言える。一方，「低―低」群は，入学当初にも5カ月後にも，それほど親しい友人は

いない。また，「高―高」群は入学当初から変わらず（相手は変化しているかも知れないが）親密な友人がいると言える。

これら3群の総合イメージ得点についてみると，「高―高」群，「低―低」群では，1回目と2回目の間には有意差がみられず，大学生活に対するイメージの肯定度に変化がないと考えることができる。それに対して，「低―高」群の場合，2回目の方が1回目よりも有意に高い（$t=2.336$, $p<.05$）。つまり，友人得点が上昇した群においては，イメージの肯定度も上昇しているのである。こうしたことから，入学当初に比べて9月の時点では，希薄になるものの，友人得点とイメージとは関連していると考えることが妥当であると思う。

引用文献

（1）星野　命(1970)「感情の心理と教育(2)」『児童心理24巻』pp. 1445-1477　金子書房

（2）井上正明，小林利宣(1985)「日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観」教育心理学研究，Vol. 33, No. 3, pp. 253-260

（3）古川雅文，藤原武弘，井上　弥，石井眞治，福田　廣(1983)「環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究」心理学研究，Vol. 53, No. 6, pp. 330-336

（4）光岡征夫(1991)「山口大学学生相談所」(全国学生相談研究会議編)『キャンパス・カウンセリング（現代のエスプリ）』pp. 173-178, 至文堂

（5）宮川知彰，寺田　晃，小野直広，中村雅知，宇野　忍，片岡　彰，梅本信章(1984)「学生の大学生活への適応過程に関する研究（その2）」日本教育心理学会第26回総会発表論文集，pp. 384-385

（6）Rosenberg, M (1965) "Society and the Adolescent Self-Image" Princeton Univ Press, pp. 17-18

（7）梅本信章(1987)「友人関係期待と現実の友人」盛岡大学紀要第7号，pp. 71-80

付表　25形容詞対についてのSD評定の平均と標準偏差

No	形容詞対	男子		女子	
		低群	高群	低群	高群
(10)	明るい―暗い	4.5 (1.03)	5.6 (1.25)	4.9 (1.16)	5.8 (1.08)
(2)	自由な―不自由な	5.0 (1.22)	5.3 (1.32)	4.9 (1.18)	5.7 (1.11)
(1)	にぎやかな―さびしい	4.5 (1.34)	5.4 (1.20)	4.8 (1.20)	5.6 (1.05)
(12)	陽気な―陰気な	4.5 (1.08)	5.3 (1.32)	4.7 (1.12)	5.5 (1.26)
(24)	楽しい―苦しい	4.4 (1.03)	5.4 (1.40)	4.7 (1.05)	5.5 (1.21)
(19)	暖かい―冷たい	4.3 (1.02)	5.1 (1.38)	4.6 (0.85)	5.4 (1.15)
(11)	親しみやすい―親しみにくい	3.9 (1.38)	5.1 (1.36)	4.4 (1.32)	5.4 (1.49)
(21)	面白い―つまらない	3.9 (1.32)	5.4 (1.28)	4.1 (1.18)	5.4 (1.32)
(16)	愉快な―不愉快な	4.0 (1.04)	5.2 (1.33)	4.6 (1.03)	5.3 (1.20)
(20)	好きな―嫌いな	4.0 (1.15)	5.4 (1.20)	4.6 (1.16)	5.3 (1.24)
(18)	感じのよい―感じの悪い	4.6 (1.00)	5.4 (1.20)	4.7 (0.97)	5.2 (1.18)
(15)	気持のよい―気持の悪い	4.4 (0.93)	5.2 (1.27)	4.7 (0.87)	5.1 (1.14)
(4)	嬉しい―悲しい	4.2 (1.28)	5.3 (1.50)	4.2 (1.30)	5.1 (1.35)
(17)	充実した―空虚な	4.4 (1.02)	5.0 (1.32)	4.2 (1.04)	5.1 (1.44)
(9)	意欲的な―無気力な	4.5 (1.05)	4.9 (1.29)	4.2 (1.19)	4.9 (1.23)
(14)	柔らかい―かたい	4.0 (1.22)	4.7 (1.35)	4.8 (1.03)	4.8 (0.97)
(8)	活発な―不活発な	3.8 (1.23)	5.0 (1.43)	4.0 (1.22)	4.8 (1.55)
(25)	頼もしい―頼りない	4.0 (0.52)	4.7 (1.25)	4.1 (0.75)	4.7 (1.28)
(22)	安定した―不安定な	4.5 (1.20)	4.4 (1.72)	4.1 (1.22)	4.5 (1.44)
(23)	元気な―疲れた	3.9 (1.39)	4.6 (1.80)	4.0 (1.38)	4.5 (1.38)
(13)	穏やかな―激しい	4.8 (1.19)	4.5 (1.22)	4.7 (1.10)	4.4 (1.31)
(7)	真面目な―不真面目な	4.2 (1.27)	4.5 (1.18)	4.2 (1.01)	4.3 (1.14)
(5)	たくましい―弱々しい	3.9 (0.73)	4.8 (1.29)	4.0 (0.60)	4.3 (1.13)
(3)	まとまった―ばらばらな	4.0 (1.41)	4.2 (1.26)	3.7 (1.20)	4.3 (1.30)
(6)	地味な―派手な	4.5 (0.94)	3.8 (1.19)	4.1 (0.89)	3.7 (0.91)

（　）内は標準偏差